

パイロット・トライアル・パフォーマンス

ヤング靖子

今月はいつも以上に嬉しい思いで、この連載を書いております。

フェーズ2後も、劇場、コンサートホールは閉鎖が続きましたが、9月に入り、文化社会青年省(Ministry of Culture, Community and Youth)、ナショナル・アーツ・カウンシル(National Arts Council)指導のもと、私達のホーム・シアターであるエスプラネード・シアターを含め、各劇場が再開への模索を始めました。

ご存知の方も多いと思いますが、エスプラネードには舞台が何カ所かございます。試験公演は最初に2回行われました。先ず、9月12日に先着順で入場されたお客様を対象にアウトドア・シアターで、続く13日に招待客のみを対象にコンサートホールでコンサートが開かれました。その後、エスプラネード・シアターで23日昼夜2回、予約システムを使い一般のお客様の入場を認め、シンガポールダンスシアター(SDT)をパートナーに試験的な公演が決まりました。各回50席のみで、入場は無料です。

政府、劇場側にとって今回の目的は、舞台周りの公衆衛生をどう守るかのチェックです。例えば、予約画面はいわゆる「エアバブル式」で自動的にお隣とは離れた席が提示され、チケットはバーコードで送られます。今やお馴染みのSafeEntry QRコードは建物全体と劇場の2カ所でチェックインし、1mの間隔を守り、入場は時間差、退場は列ごとの誘導となり、終演後細かいフィードバックを求められました。



3組揃ってのカーテンコール

踊る側にとっては別の挑戦がありました。

まずは3ヶ月超という経験した事のない長い自宅待機に続き、練習再開後もスタジオ使用に制限があったため、体のコンディションを戻す時間がかつてないほど短かったこと。また、最初に用意していた演目も、当局からの指導要綱が変わり、直前で変更を余儀なくされたことです。その結果、全員参加から3組6人の出演となり、そのペアも固定する厳しさでした。楽屋でのソーシャルディスタンスも徹底されました。私がこの試験公演について知らされたのは公演の2週間前でしたが、その時点でも上演の是非は流動的で、正式に発表されたのは公演日のわずか10日前という慌しさでした。

公演名は「From Here On(ここから)」と名付けられ、演目は「コンフィギュレーションズ」「くるみ割り人形」「白鳥の湖」「ドン・キホーテ」より、4つの代表的なパ・ド・ドゥ(男女二人の踊り手により展開されるバレエ)、出演は内田千裕と中村憲哉、エティエン・フェレと中濱瑛、郭明宜と上妻悟の3組6人と発表されました。蓋を開けてみると予約は回線がパンクする程の人気で、急遽、22日に関係者を交えたプレビューも設定されました。当日は先の組閣で初入閣されたエドウィン・トン文化社会青年相がお見えになり、「初めて観たバレエがSDTのくるみ割り人形でした」と懐かしそうに話していらっしやいました。トン大臣は終演後もダンサーやスタッフとお話になり、「パフォーマーにとって舞台が命である事はよく分かります」とアーティスト達の苦境に理解を示され、小さなスケールながら、私達にとっての「日常」が戻って来た事を共に喜んで下さったのが印象的でした。



内田千裕さんと中村憲哉さんによる Configurations (2020)



コンコースから劇場入り口へ



普段は休憩時間も賑やかなホールもこの日は静か



ソーシャルディスタンスの配慮のされた劇場の中の様子

ドリアンの愛称で親しまれるエスプラネードの建物は、右にコンサートホール、左に劇場を抱え、その間にあるコンコースは通常ですと、無料コンサートの会場となり、常に人と音楽の気配のある建物です。ところが今回は、眠りの森の美女の城下町はこうであったかと思うような静寂に足が止まり、思わず人の姿を探してしまいました。劇場への階段を降りると、見慣れた黒い制服の入場係がバーコードリーダーを片手に待ち構えています。マスク越しに、笑顔で再会を喜びました。普段は「ハロー」ですが、この日は「ウェルカム・バック」と声をかけられ、先に進むと、所々に配置された係員さんほどの笑顔も笑顔で、それだけで私は胸がいっぱいになりました。

公演は最初に芸術監督が登場し、お客様への挨拶というよりは、久しぶりに会う友達に話しかけるように「3月の公演以来、ここに戻ってくるのにこんなに時間がかかるとは想像もしなかった」と語り始めました。それは客席の私達も同感でした。バレエが始まると半年間の色々な事が思い出されました。コロナ禍でなければ、以前ご紹介した野外公演が行われていた週でした。でも、いつの間にか「コロナがなければ」と思うことはなくなりました。コロナがあったからこそその気づきや、新しい試みがあった事を考えると、この半年は無為に過ごした時間ではありませんでしたし、新しい芽が育つ実感もありました。

1時間の試験公演はあっという間で、終演後のお喋りもなく、粛々と劇場を後にしました。とは言え、ライブで見る舞台芸術は新鮮な余韻が残りました。オンライン鑑賞は便利ですが、やはりアーティスト達と同じ空間を共有するパフォーマンスには敵いません。舞台から受け止めるものの大きさがまるで違いました。今回のプログラムは、この試練を乗り越え舞踊が持つ感動を伝え続けたいというメッセージが込められていましたが、コンサートホールで行われたシンガポール・シンフォニー・オーケストラ(SSO)のプログラムにも同様の想いを感じました。

今回の成功を受け、「新しい日常」の中で劇場やコンサートホールの対応を模索する日々は続きます。11月号が皆様のお手元に届く頃、シンガポールの生活はどこまで開かれているのでしょうか。

写真/資料提供:Singapore Dance Theatre



白鳥の湖第2幕よりパ・ド・ドゥ
内田千裕さんと中村憲哉さん(2020)



くるみ割り人形第2幕よりパ・ド・ドゥ
金平糖の精は中濱瑛さん(2020)

終演後、プリンシパルの内田千裕さんがこんな感想を寄せてくれました。

「舞台上、舞台裏と客席全てが、こんなに静かな公演は初めてでした。とても不思議な空間でしたが、安全面を考慮して頂いた上で踏めたこの第一歩は、とても有り難く、そしてとても大切なことだと思えました。たとえどんな形であっても、舞台上で踊る機会を頂いた私達は、嬉しい気持ちでいっぱいです。一日も早く、SDTのみんなが揃って、沢山のお客様の前で公演ができる穏やかな日々が来ることを願っています。」



ドン・キホーテ第3幕より結婚式のパ・ド・ドゥ
プリンシパルの郭明宜さん(2020)

プロフィール/近況:ヤング靖子

Ambassadors Council of Singapore Dance Theatre

文中の“新しい芽”の一つにシンガポール政府観光局とのコラボレーションがありました。日本に向けてシンガポールの魅力を伝えるインタビューで、撮影はジュエルとエスプラネードで行われ、SDTから中濱瑛さん、SSOからバイオリニスト佐々木智佳子さんが出演しました。芸術の秋らしい人選ですね。



「SingaporeImagine」
シンガポール政府観光局
プロモーションビデオ



シンガポール政府
観光局日本語サイト